
ここあ

灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じこあ

【Zコード】

Z9593X

【作者名】

灯

【あらすじ】

あなたにとつては何て事ない一言。

それだけで、彼は私にとつて特別な人になった。

その彼から告白をうけ、付き合つことに。

しかし彼の幼馴染の兄妹が邪魔をしてきて！？

ラブラブになれる日はくるのか？（すでにラブラブ？）

イラスト置き場（前書き）

イラストが苦手の方は『遠慮ください』。
イメージを壊したくない方は『遠慮ください』。
ただの自己満です。
すみません。

イラスト置き場

主人公たちを差し置いて脇役です。

* 万里 龍太 *

http://3067.mitemin.net/i3562
/
> a href="http://3067.mitemin.n
et/i35570/" target="_blank"><>i
mg src="http://3067.mitemin.ne
t/userpageimage/viewimageicon/
icode/i35570/" alt="ここあ*万里、龍太
* <>/a<

万里描きやすいです。自分に素直でこの2人好きです。

4話のおまけ的なものです。

<http://3067.mitemin.net/i35777/>

イラスト置き場（後書き）

てか画像くっついてないですよね？あれ？

1 (前書き)

Rは念のためです。

18になりそうな部分だけお月様行きです。

日本語の苦手な作者です。それでもいいといつの方だけお入りください。

あなたにとつては何て事ない一言。

「ねえ、やなどり梁取さんはどう思つ?」

それだけなのに、私にとつてはあなたが特別な人になった。

クラスで、席が近い者同士グループを作つての意見交換。いつも私は居るか居ないか分からぬ扱いで、意見を言おうと頑張つても言葉を挟めないのがいつものこと。

もちろんこの日も同じで、誰も自分の存在はないかのように話は進んでいた。4人グループで順々に聞いているのに何故か私の番になる前に話が盛り上がり、そのまま聞かれずに話が進む。

自分から意見を言えるほどの勇氣もない…本当に自分でも自分が嫌になる。

悲しくなつて少し俯いていたとき、声をかけられた。

「ねえ、梁取さんはどう思つ?」

空耳かと思つて声の方を向いたら彼は私を見ていた。嬉しくて、初めは夢でも見てるかと思つたけど、現実で。すぐすぐ胸がいっぱいになつた。

なんとか意見を、たどたどしくでも言い終えた後、あなたはっこりと笑つて、「うん。俺もその考え方、良いと思うよ」と言つてくれた。

その笑顔も、とてもきれいで何故かすこく泣きたくなつた。それからずつと彼は私にとつて特別な人。秘かに想い続けてた。

だから、

「ずっと気になつて…俺と付き合つてほしい…」

そう言われたとき、すごく嬉しかつた。私なんか、つて思つたけ

ど、そう言ってくれるあなたに少しでも何かを返したくて、こんな
私で良いなら側にいて彼に喜んでもらえることしたいと思つたの。

* * * *

さわさわと風が爽やかに撫で、心地よい日の光に照らされながら
私たちはお弁当を食べていた。

「おいブス。その汚い手を離せよ」

ズズズーと居たたまれない気持ちを押し殺し、私はジュースを飲
む。

「はあ！？目腐つてんじやない？こんな美少女に向かつて…つーか
あんたが放しな！チビッ！！」

あ、あ！？チビだとお！？と罵詈雑言が続く。ここでも私は空氣
と化している。

「いや…、二人とも放してくれないかな？『飯食べれないし…』
と少し困ったように言つたのは恐れ多くも私の彼氏…神木瞬君。
その両腕にがっちりとしがみ付いているのは彼の幼なじみの二人だ。
神木君は学年でも有名な人で、（すごくかつこいいからモテモテで
す。優しい性格がそのまま顔に出ているんだもの当然だと思うんだ
けどね）かつこいいという理由だけではなく、その両腕にいる幼な
じみで、つて言つた方がいい氣もするぐらいだった。

幼なじみの矢吹万里さんと龍太君は兄妹で、二人は大の瞬君好き。
瞬君への好きっぷりはすごいもので、この学校でその事を知らない
人は居ないんじゃないかと言われるくらいだった。

二人（三人）ともとても整つた顔立ちで、万里さんが自身を美少
女と言つたのは間違いではなかつた。
兄の龍太君は少し目つきが鋭くて少し怖いけど、童顔（つて言つた
ら怒られそうだけど）だからか、瞬君を奪い合つてる二人を見ると
ちょっと可愛く思えてしまう。もちろんまだ喧嘩は続いていたりし
ます。

「梁取さん…」めんね

ふと謝られ、瞬君の方を向くと彼は申し訳なさそうにしていた。
「本当は一人きりで食べたかったんだけど、一人がどうしても会つてみたいって言つて…」

私なんかと一人きりで食べたいと思つてくれるなんて。

残念そうに謝る彼に胸をときめかせながら慌てて返事をする。

「ううん！ 神木君の大切な人に会わせてもらえて、私嬉しいよ」

吃驚して神木君。でも心からの言葉だから。

彼が一人を大事にしてるのは知つてゐる。その一人に会わせてもらえるなんて…こんなに幸せでいいのかな？

「ありがとう」

と言いながら、嬉しくてついついふにやりと顔をゆるめてしまつた。まさかこんな縫まりのない笑顔に神木君がときめいてくれていたなんて、知りもせず。

「でも…」

と神木君が何かを言おうとした時、タイミングよく放送が鳴つた。
『2年B組神木瞬君今すぐ視聴覚室まで来てください。繰り返します…』

「おい瞬！ 呼んでるぞ！ 早くいけよ」

「そうだよ瞬ちゃん！ 後は心配しないで」

えつ？と、戸惑う瞬君をぐいぐい押しながら屋上から校内へ入れるとすぐさま扉を閉めた。呆気にとられて見てくるとすゞの勢いで龍太君が振り返ると、

「おいお前！ …言つとくけど俺はお前なんか認めないからな」と睨まれた。

「ふふ、万里は許してあげる」

「はあ！ …お前何言つてんだ！？」

「だってこの子と付き合つてたら万里の良さに気づいてくれるじゃない」

万里の方が何百倍も可愛いし。と笑顔たっぷり。

か、可愛い…。

はあーとずいぶんと長いため息をついた龍太君はげんなりとしていた。

「むしろお前なんかと比べたら、周りが良すぎでお前以外なら誰だつていいって分かつちまうよ…」

「はあ！？ なんなわけ！？ チビだから分かんないだけでしょ！？」
「んだとテメエ！ 身長は関係ねえだろおが！ と、再び喧嘩勃発かと思われたが万里さんは付き合つてらんないから行くわと言つて出でいつてしまつた。何とも気まずい空氣。

どうしようかと悩んでいると龍太君は一度私を睨んで、そのまま屋上から出ていつてしまつた。

このまま一人で屋上に居ても仕方ないので、私も自分の教室へと戻つた。

「ひやあ…あんたよく無事だつたね」

吃驚しているのは私の唯一の友達ヨシちゃん。存在感がない私だけ、ちゃんと友達がいる。

「大げさだよ…」

「なにのんきな事言つてんの！？ 神木がもてるのに何で今まで彼女がいなかつたのか知らないの？」

「…知らない」

と言つたらため息をつかれた…。

まあ沙耶だもんね… と言われたけど、何で！？

「矢吹兄妹のせいつて話。神木を好きだつて噂が流れたらすぐ潰しに行つてたみたいだよ」

まあ現に泣いてる所見たしと爆弾発言。

「潰し…」

余りに物騒な言葉に背筋が震える。

「沙耶の場合神木からの告白っていう矢吹兄妹の盲点をついた出来事だったからうまく実つたと私はにらんでるんだけど。まあだからあんた気をつけなよ?」

何のことだか分からず、きょとんとしてるとコシちゃんの顔が近づいてきた。

ち、近すぎないかな…?

「矢吹兄妹もだけど、今まで矢吹兄妹に邪魔されてた人たちからしたら沙耶の存在はかなりおもしろくないんだから一人にはならないようになきやつてことよ」

そつか、そんな心配もあるんだ。悲しいけど、確かに何の取り柄もない私だし、周りが納得出来ないのは仕方ないと思つ。でも、

「コシちゃんありがと!」

こうして私を心配してくれる人がいる。それが本当にありがたくて、嬉しい。

また締まりのない顔になつてしまつたのはしょうがないよね。

「くうつ…神木もこういうところに惹かれたのね」と呟いたが、その声を拾つことが出来なかつた。だって、その時いつのまにか来ていた神木君に話しかけられていたんだもん。

「梁取さん英語の教科書ある?貸してほしいんだけど」

忘れて来ちゃつてと申し訳なさそうに言つ。

「うん、あるよ。待つてね」

机の中を「ソソソ」とあさる。

そういえば。

「さつきの呼び出しが大丈夫だったの?」

「あ…それが俺にもよく分からないんだけど、行つたら鍵がかかって…教務室に行つて聞いても分からな…」

そう、不思議だねつて一人で笑つていたから、まさか周りがその会話を聞き耳を立て『それ絶対矢吹兄妹の仕業だろ…!』って思つ

ていたなんて知らなかつた。

「おっ、瞬じやん。なに？忘れ物を口実に彼女に会いに来たの？」
神木忘れ物とかしたの見た事ないよなど神木君の友達である小林君と佐藤君がにやにやしながら話かけてくる。

その瞬間神木君は顔を赤くしてしまつた。

え？

「ま、まじかよーお前つ可愛いなあ…」

「あつ…じゃあ俺もうすぐ授業始まるから行くね」

梁取さん、また…と言つて神木君は教室を急いで出でいく。
顔を赤くした私はそれを呆然と見ていた。

「梁取さん愛されてるね」

と佐藤君言われてより一層頬が熟れた果実のようになつてしまつたのは言つまでもなく…

蒸発してしまいそうな私を見て、三三ちゃんもにやにやしながらも大切なことを教えてくれた。

「追いかけなくともいいの？Bクラスは次移動教室だつたはずだけど、それまだ渡してないんでしょ？」

指を指された先にあるのは先ほど貸すつもりで机から引っ張りだした英語の教科書。

たぶん…多分だけど、あの様子だと神木君は教科書を忘れてきてないんじゃないかなって思う。

それでも、私は彼を追いかけたい。
追いかけて、たくさん話をしたい。

「う、うん！行つてくるね」

そして私も神木君と同じ様に急いで教室を出た。

* * * *

「神木君！」

結構時間が経つてしまったのか、私の足が遅いのか、渡り通路に

彼は居た。

突然の私の声に驚いたようで、吃驚した顔でこちらを振り向いた。

「梁取さん…どうして…」

まだ初春な今、太陽の光を浴びてもまだ寒く、さわさわと葉の音が耳に心地よい。この渡り廊下は外にあり、周りの緑が更に彼を素敵に見せているのは私の欲目なのか…。

「あの…これ」

立ち止まつて居た彼に、鼓動を落ち着かせながら近づき、ソレを差し出した。

「あ…うん、ありがとう」

少しばにかんで、受け取つてくれた。

少しの沈黙。

頑張れ自分。と活を入れ、神木君を仰ぎ見る。

「あのつ…さつき、神木君が…用があつてでも来ててくれて、すゞぐ嬉しかつたよ…あの…ありがとう」

恥ずかしくて。それでも本当に嬉しかつたから意識せず笑顔になつてしまつた。

「俺も。…そう思つてくれて嬉しい。」

真つ赤にさせた神木君がふにやりと笑つた。その顔がすぐくすぐく可愛くて、胸がきゅーんとなる。

絶対さつきより顔が赤いはずだ。

教科書を受け取りながら彼は、「本当は教科書あるんだ…けど、昼はあんまり話せなかつたから」と言つて照れて笑つた。

その後他愛もない会話をしていたけど、予鈴が鳴り、寂しい気持ちを抑えながら別れた。

* * * *

校舎に入る扉の前に来て、ふと声が聞こえる事に気が付いた。
正直あまりいい雰囲気がしない声色に、ビクビクしながらも近づ

いていったのは、何故か行かなくてはいけないと、心が訴えていたのかもしない。

* * * *

生徒たちが自然とふれあい、豊かな心を育てて欲しいと願つて作られた校庭は至る所に縁があり、上手く人影を隠してくれる。そんなこともあり、本来の目的とは（ある意味では正しいのかかもしれないけれど）違つた用途で使われていた。

現にこの時間に、ここに人が居てはいけないだらうにいるが、誰にも気づかれない。

「お前マジ生意氣なんだよ！…なんだよその田一喧嘩売つてんのか！？」

「はあ？てめえらから売つてきてんだろ。お前等に何かしていいこともねえしな」

ふざけんなと怒氣の孕んだ声と共に龍太君の胸ぐらを掴まれる。

そう、声がした先にいたのは龍太君たちで、私は何も出来ずそれを遠くの校舎の角から様子を伺つていた。

助けるにしても私が出ていつたのでは明らかに龍太君の邪魔になる。どうしようかと考えていると、周りにいるガラの悪そうな人が何かに気づいたように意地の悪い顔をした。

「てかこいつゲイだつて噂の奴じやん」

は！？なんだそれとゲラゲラと周りが笑いだした。

それに龍太君はぴくりと動く。

「なんか幼なじみの男が好きだつてすっげえ噂なんだよな。その相手の男も悪い気してねえのか、こいつとすげえ仲いいらしいぞ」
まじかよ！そいつもお仲間か！？てか俺たち大丈夫かよ！…と一層酷くなる笑いに、龍太君の声が静かに響いた。

「何がおかしい。好きだつて気持ちを笑うお前等に理解できるかどうかは分からぬが、あいつは笑われて良い奴ぢやない。」

まあお前等みたいに腐った頭じや分からねえだろうがなと嘲つた。それに力チンときたらしく、一気に彼らの取り巻く雰囲気が剣呑なものに変わつた。

もちろん龍太君はすでにキレていたらしく、今にも殴りかかりそうになつていたが、私はそれに気づかない。

なんとかしなくてはとそればかりが頭を巡る。意を決して、私は肺に空気をいっぱい吸い込ませた。

1 (後書き)

漫画で描いていたお話を。なのでページ数的にヒーロー（神木君）との絡み少ないです。（それってどうなの！？）
続ければめちゃめちゃ絡む予定です。

「先生！…」

古典的だと言われようがこれしか案はなく、震えそうな声をなんとか堪えて叫んだ。（でも震えてしまつた…）

もちろんこの時に最悪なことを想定して（嘘だと見破られて、私自身も捕まるというパターン）すぐ隠れられる場所を確保しながら。その声に驚いて彼らは走つて逃げていつた。

ふうー。作戦成功。心臓がバクバクといぐらに脈打つて

る。でも彼らが戻つてくる前に龍太君を
「なにやつてんだよ、あんた」

え？と頭上を見ると龍太君が上から怪訝な顔をしてのぞき込んでいた。

隠れられていると自信を持つていたのにバレバレだつたらしい。ヒヤリとしたがあの恐ろしい彼らは居ないのだから成功のハズだ。

「と、とりあえずあの人たちが戻つてくる前に、に、逃げよう」と腰を上げようとしたが、ダメだつた。腰が抜けていたらしい。さらに渋い顔をされる。

「あいつらは戻つて来ねえよ。そんな度胸ある奴らじやねえし」
そつそつか。ならよかつた。

ほうと息を吐くと龍太君は理解できないといった顔をして訊いてくる。

「あんたさ…瞬の話を聞いた感じだと、こんな真似できるように思えなかつたんだけど、なに？作つてたわけ？」

射抜かれそうな目に背筋が震える。

口の中がカラカラで声が上手く出なくて、頭を振つた。
そして、何とか声を絞り出す。

「ち、違つ…だって龍太君は神木君の大切な人だから」

だから、いつにか時に動けなかつたら、絶対後で後悔すると思つたから。

神木君と出会い少しずつだけ自分で行動しようと思つた。玲ちゃんともそつやつて仲良くなれた。

どさりと音がして隣を見ると龍太君が座つていた。

「あんた、変な奴だな」

「え？」

「冷静に考へてみれば、あんな震えた声、作つてる奴にしちゃ間抜けだしな…腰も抜けてるし」

「ふ、震えてたのもバレてたんだ。

「なあ、あんた。瞬のどこが好きなわけ？」

探られるような鋭い目で問いかかれ、緊張してしまつ。

だつて彼にとつて大切な問いのはず。

「…神木君は気づいてくれたから…」

目が怖くて、俯いてしまつた。

「は？」

「私、あまり周りから気づかれないみたいで、みんなで何かしようつて言つ時とか何も言えなくて、出来なくて…でも神木君は気づいてくれたの。それが私にとつてすごく嬉しくて、特別なことだつたの」

「ふーん。自分から動きもしないで…他力本願だな」

嘲るよつに言われた言葉はその通りで。分かつていても胸が痛い。

「…うん、そうなの…」

「はつ、認めるんだ。じゃあこれからも瞬におんぶだつこしてもらうつていうわけか…！」

怒鳴られるよつに言われた言葉に、頭を振つて答えた。

「違う。だからこれからは自分で動いて行こうと思つて…少しでも神木君に何かを返してあげたくて…まだなんにも出来てないけど…」

「…」

「あつと万里さんが彼女だつたら神木君を幸せにしてあげられるん

だらうけど、神木君がいって言つてくれてる間は頑張りたいから

「無理だよ」

「…え？」

「あいつは瞬君を幸せにできない。」

「あいつって万里さんのこと？」

「どうして…？あんなに大好きなのに…」

「万里は自分勝手だから、本当に瞬のことを考えてやれない。いつ
だつて頼りつきだ。そしたら瞬はきっと甘えられない。」

絶対にそれはさせない。と言つた。

あまりに真剣なその顔になんと返して良いか分からなくて、俯いて
いたら龍太君がポツリと言葉をもらした。

「あんたに怒つたけど、あれ、本当は自分自身に対しても言つたよ
うなもんなんだ」

「え…？」

「結局俺も瞬に頼りきつてんだよ。…あいつのために何にもしてや
れない」

さつきの奴らにも瞬を誤解させたままだしなと悔しそうに呟いた。
「…俺たちの親ろくでもねえ奴らでさ…顔も見たくなえし、家にも
帰つてなかつたんだ…そん時瞬に話しかけられて…瞬にとつてはな
んて事ないことかも知んないけど、俺はすっげえ救われたんだ…多
分万里もそつだから、あんなに執拗する」

そう話す龍太君はいつもの鋭さはなくして、すじく落ち着いていて、
優しい顔にみえた。

「なんでその話を…？」

きつとあまり話したくないんじゃないかなって思う。

「たぶん…あんたも同じだと思ったから」

こちらをじつと見ながら龍太君は静かに言つた。でもすじく胸に
くる。

そう、きつと同じ。

誰かに訊かせたら「そんなことで」って笑われるかもしれない。
それでも私には、私たちにとつては、かけがえのない出来事で…
大袈裟かもしないけど、世界が変わったって言えちゃうくらいで。

「だから瞬が傷つくような相手だつたら俺は容赦しない」
はつきりと、私を見て言った。

「俺はまだあんたを認めた訳じゃない。瞬とつき合えたからついて
ちゃつけると思うなよ」

うん。分かるよ。分かったよ。

彼がどれだけ、大切な人なのかつて。

「うん。頑張る」

つて言つたら何故かすごく顔を歪ませた。

「意味分かってんの? 一人つきりになんてさせてやんないつて言つ
てんだけど」

「うん。それは分かつてるよ。彼女になつたからつて三人の邪魔は
しないよ」

彼女になつたからつて、三人の関係の方がずつとずつと強い。そ
れなのに後から出てきた私が神木君を独り占めするなんて出来ない。
だから三人の中に居させてもらえてること自体がすごくありが
たいことだと思う。

まずは一人に認めてもらえるようにしなくちゃ。

そう思つていつたのに、付き合つてらんないとばかりに背を向け
られた。

「別に助けなんていらなかつたけど、腰抜ける思いしてまで頑張つ
たみたいだしお礼くらい言つてやるよ」
と言つて歩いていつてしまつた。

一步前進出来た気がして、嬉しくてその後ろ姿を見送つた。

その姿を校舎から誰かが見ていたなんて氣づくはずもなく…。

軽やかな動きにスカートが踊り、すれ違う人はその姿を目で追つた。

視線を浴びている可憐な少女は、前方に愛しい人の姿を見つけるとすぐさま飛びつき腕を絡ませる。

「万里またお前は…」

瞬は絡められた手を離そうとするが意地でも放すまいとする万里によつてそれはかなわず、半ば諦めてしまつにさせられる。それを機嫌良さそうに万里は笑つた。

「機嫌がいいな。どうした？」

「うん？」と上目使いに瞬を見るその姿は、他の男であつたならころりと落ちてしまつほど、可愛い。そして花がほこりびるよう

に笑つた。

「瞬ちゃんは龍太が幸せになれたなら嬉しい？」

質問の答えと違つ氣がするが瞬は笑顔で「もちろん」と答えた。
「万里もね、龍太が幸せになれたなら嬉しいなあ。だからね、お手伝いしてあげようと思つて。そしたら瞬ちゃんも協力してくれるよね？」

「当たり前だろ。何をすればいい？」

その言葉に満足したように万里は笑う。

「じゃあその時になつたら言うね」

もう少し一緒に居たかつたが、するべき事がある。
するりと腕を放した万里はにっこり笑つた。

「じゃあ瞬ちゃん、万里頑張るね」

楽しみにしててと言葉を残し、来たとき同様軽い足取りで去つていく。

状況を理解出来きるはずのない瞬は、ただその背中を見送つた。

* * * *

「万里さん… どこに行くんですか?」

私は今万里さんの後ろを追うよつよつ、校庭を歩いていた。

そう、あの龍太君が怖い人たちに絡まれていた校庭、だ。

「うん? もう少しよ。」

につこりと微笑まれると何も言えず、また後ろをついて行く。龍太君と話をしたのは昨日。

今日も三人でご飯を食べたけれど、昨日と変わらず、私は空氣と化していた。みんなご飯を食べ終わり、それぞれの教室に戻るときに、万里さんに呼び止められたのだ。(神木君は、万里さんがあまり構つてこない事をこれ幸いとした龍太君に引っ張られていった)ヨシちゃんが言うように一人つきりにならない方がいいのかもしれないけど、龍太君のように話してみなければ相手の考えていることは分からぬ。認められないにしても、認められるためにはまずは話をしてみなければ始まらないと思う。

「万里ね、龍太のことはムカつくチビで邪魔だとは思つてるけど、幸せになつて欲しいと思つてるの…」

頷いていいのかしらという言葉が含まれていて、返事に困る。あまり使われていない体育倉庫の前まで来て、万里さんは扉の取っ手に触れた。

「だからね、万里が恋のキューピットになつてあげようと思つて! 万里には瞬ちゃんより龍太がいいと思わないから分からないけど、女の子つてドラマチックなのが好きでしょ?」

「ど、どうしよう。これは世にいう恋愛相談というものなのかな。まるで経験がないからなんと答えていいか分からないが、女の子はドラマチックが好きなのは確かだし頷いた方がいいのかな?」

「えつと…」

「それでね、そうなると男たちから救つてくれたってかなりきゅんとくると思うんだけど、それで龍太が怪我でもしたら瞬ちゃんが悲

しむかなつて……」

別に万里はいんだけど……龍太意外に喧嘩強いから楽しきなさそうだし……と呟いていて、口を挟める隙がない。

私の意見を求めていた訳ではないらしい。

「そうなるとやつぱり女の子かなつて思つて……大丈夫!…すぐに助けを呼んできてくれるから!」

開けた扉に万里さんは私をえいと突き出した。

その力に抗うことなく尻餅をつく。

中には派手目な女の子達や、少しきつめに見える子など、たくさんいた。

ヒリつくお尻は氣になるけど、それよりもっと氣になるのはその女の子たちが私の背後にずらりと並んでいることだった。

「ちょっと矢吹…うちらを！」と呼んでじうごうつもつよーやつと謝る気になつたわけ！？

「え？？万里がなんで謝んなきやいけないの？何にもしてないのに……」

よくもぬけぬけと……とギリギリと歯を食いしばる人は、きれいな人なだけにすごく怖い……。

「万里はただみんなに協力してもらおつかと思つて……」

「はあ！？協力！？なんで私たちがあんたの協力なんてしなきやいけないのよ！？」

「ふふふ……じゃーん！……なんとこの子が今の瞬ちゃんの彼女です！」両手を広げて私を紹介してくれたけれど、あまりのことに啞然としたままだった。

たぶん氣のせいじゃないと思つんだけど、”今”を強調していた。

「は？この子が？」

「納得できないんだけど」

みんな一斉に私を見ながら言つてゐる。頭上からは無数の視線が……痛い。

「じゃあ万里はもお行くね」

冷や汗が背筋を伝う中、注目が逸れた万里さんは元気いっぱいに言葉を残し、笑顔で去つていった。

待つたを掛ける暇も無く、冷たく頑丈な扉が目の前で堅く閉ざされるのを私はただ口を開けたまま見送った。

後ろからはなんだか不穏な空気が流れしていく、振り向く勇気はもちろん、…無かつた。

この時には万里さんの話はすっかり忘れていた私で……えっと、これから私はどうすればよいのでしょうか…？

きた道を軽い足取りで万里は歩いていた。
なにせ先ほどまで善行を行っていたのだから、重くなるはずはないだろう。

つい抑えられず笑みを浮かべていると前方からよく見知った、愛しい声がかかつた。

「万里！？ 梁取さん見なかつた！？」

が、内容は気に食わない。ついついむくれてしまつるのは仕方ないことだらう。

「…知らない。」と言つて腕を絡めたのにそれどころではないというように、すかさず引っこ抜かれて更に面白くない。

「まだ教室に戻つてないつて…」

そういうて今までに万里が来た道を行いつつとするものだから万里は焦つた。

「瞬ちやん！…そつちになんて何もないよ！ まずは保健室でしょ！」

「もう吉田が見て、居なかつたから俺のところに來たんだよ！」

吉田とは沙耶の友達でヨシちゃんと呼ばれている子だ。

内心で余計なことをと舌打ちしつつも、行かせてなるものかとセイターを引っ張るが、力にかなうはずもなくずるずると引きずられ、万里はすぐに降参した。

「瞬ちやんストップ！！ 万里に協力してくれるって言つたでしょ！？ 龍太の邪魔する気！？」

さすがにその言葉で止まつてくれた。

「え？ 龍太、今、そうなの！？」

何度も頷き、万里の必死さが伺える。が、瞬は再び歩きだす。

「瞬ちやん！？」

「大丈夫。龍太の邪魔はしないでこつそり探すから」

「ダメダメだめ つー！」

「何やつてんの？」

「瞬ちゃんが龍太の邪魔しようとするからでしょ！」

「俺の邪魔？」

別に瞬ならいいけどときよとんとした龍太が一人を見ている。それもかなり近くで。

「「龍太！？」」

二人の叫び声は綺麗に被り、その顔も驚きが現れている。すでにこの時点では龍太は嫌な予感がしていた。

「お前、今告白中なんじゃ……」

「はあ！？告白？誰にだよ……」

「誰つて、万里が……」と言つて、二人の視線はそこへ集中し、万里は顔を青くさせた。

「万里… どういうことだよ」

いつもなら何とも思わない龍太の顔が、何故か今日ばかりは怖いと感じる万里であった。

* * * *

「梁取さん！！」

突然後ろの扉が開くと同時に切羽詰まつた声がして、吃驚しながら振り向いた先には神木君がいた。

おらちゃんと歩けよ。と龍太君に引きずられる万里さんの姿も神木君の後ろから見える。

そして私を見た神木君の顔は驚きに変化した。

無理もないと思う。

正直自分でもこの状態に驚いてどうしたものかと思つていたのだから。

そう、私は大人数の女子に囲まれ正座をして（そうしなくてはい

けないと恐怖概念で体が勝手に動いてしまった（彼女たちの愚痴を聞いていた。

そして沈黙が走る。

主に万里さんへの。

「…えっと…、これはどうしたの？」

真っ先にこの沈黙を破ったのはもちろん神木君で、その一言で彼女たちの抑えは吹っ飛んでしまったように勢い良く（時には涙ぐむ子まで）神木君の側へ駆け寄っていく。

「瞬くん。聞いてよ！あのねつ前私が瞬君の目の前でスカートの留め具が吹っ飛んで、パンツ姿になっちゃったのは決して私が太つたわけでも、痴女なわけでもなくて万里が」

「それを言うなら私だつて何もしてないのに瞬君の前でいきなり万里に、まるで、私がつ！オナラをしたつて反応されてつ！誤解を解く前に万里に連れてかれちゃつたけど本当にしてないの！あれは万里が」

「私だつて万里に！」

「万里が！」

「万里につ」

次々に弁解が殺到し、神木君も訳が分からずたじろいでいる。が、彼女たちは必死になつてしているので、そのことに気がついていない。そしてさつきも聞いていた内容だけど何度聞いても壮絶だと思う。好きな人の前でそんなことが起きたら私は立ち直れないし、告白なんて出来るわけがない。と言つより学校にすら来たくない。

ヨシちゃんに気を付けると言われたけど、話を聞いていると気を付けようがない事ばかりだった。

「ちよつ、ちよつと…！何よこれ…？何で万里が悪者になつてるので

！？」

いつまでたつても止むことのない万里さんの所業の抗議にさすがに耐えきれなくなつた万里さんが顔を真っ赤にさせて声を上げる。

その瞬間みんなの反応は、怖かつた。

いつせいに万里さんを般若のような顔で睨み付けた。

きつと神木君からは後ろ姿しか見えてないから気がついてはいけれど、万里さんはもちろん私と龍太君はばっちり見える位置にいたため、あまりの怖さにビクリと肩を揺らしたまま固まってしまった。

「よく言つわよ……瞬君の彼女をここに連れてきて私たちにシメさせるつもりだつたでしょ！？」

「なつ何よ！私はただ龍太のためにしただけじゃない！」

その言葉にすかさず龍太君が反応した。

「おい！そんなこと頼んでねえしお前の勘違いだろ！」

「ふん！どうせ、イジメてる所に瞬君を連れてきて私たちを嫌わせようとしたくせに！誰がその手に乘りますか！」

誰も龍太君の反論は聞いてくれないようだけれど、ビタやらい万里さんの独断だとみんなは分かつてゐるようだ。

「今までの悪事全部瞬君に怒られればいいのよ！」

そうよ！そうよ！と女子たちは声を揃えて「瞬君後はよろしくね！」と、みんなすつきりしたように倉庫から出て行く姿を私たちは唖然と見送ることしかできなかつた。

嵐が去つた。まさにそんな感じだ。

「……万里、今の話は本当？」

静まり返つた倉庫に神木君の声が響いて、万里さんは肩を揺らした。

「何のこと？…それに、今日の事なら瞬ちゃん協力してくれること言つたじゃない」

「協力はするよ？でも梁取さんなら話は違つ

ぐつと万里さんは唇を噛み締めた。

なんの話でしようか？と聞きたいけれど、そんな雰囲気ではない。

しかし龍太君には関係ないらしい。

「てか真面目なところ悪いんだけど何でそんな誤解があんだよ？」確かに万里は頭おかしいところがあるけど、と龍太君が言葉を挟んだ。

「隠さなくつてもいいじゃない！万里は分かつてるんだから…」「分かつてねえから聞いてんだよバカ！！」「バカですって！？チビの龍太に言われたくない…」「だからチビは関係ねえだろおがつ…！」

あの…話が脱線していますが…。

「万里」

神木君の静かに問う声が響いて万里さんは口を噤つぐみ、観念したよう口を開いた。

「…だつて昨日見たんだもん。龍太がその子と見つめ合つてるのを」万里さんが私を見る。

……………えつ！？わ、私！？

「みつ見つめ合つ…？」

「はあ！？いつそんなことしてたつつうんだよ！？」

「してたじやない！？昨日授業サボつて5限目に校庭でつ…！万里見たつて言つたでしょ！？龍太女子と話すどころか見つめ合つんてしないのに、してたつてことは好きつて事じゃない！！」

昨日…。言われて気がついた私と龍太君は同時に声を上げた。

「…あつ…！」

慌てたように龍太君が続ける。

「ばつ違ちげえーよ…！…なんでそなるんだよ！…」

助けを求めるように神木君を見た龍太君は何故か固まってしまつた。

「違つ、昨日絡まれてたところにこいつが助けに来ただけで見つめ合つてなんかねえよ！そん時話しだけだ！」

「それで恋に落ちちゃつたんでしょ？男の子もそういうのに弱いも

んねつ！」

万里は分かつてゐるからと胸に手をおいたのを見た龍太君は青筋を立てた。

「お前つマジ黙れよ！…話がややこしくなんだよ…」

つーかコレ、俺と瞬を仲違いさせて瞬を独り占めするための作戦だろ！と、見てるこっちが痛くなりそうなくらい思い切り口を齧掘みにした龍太君に、痛いと万里さんは抗議をしている。

助けた方がいいのだろうかと悩んでいると神木君がいつの間にか目の前まで来ていた。

「それ、本当？」

「え？あ、うん。あんまり役に立つてなかつたみたいなんだけど…」

「…大丈夫だつたの？」

「う、うん。そんなに度胸ある人じやなかつたんだつて。だから龍太君無事だつたよ」

安心してつて意味で笑つたら何故か抱き寄せられてしまった。
あまりに突然で心臓が暴れ出して顔が熱くなる。

「か、神木君…？」

「龍太もだけど、梁取さんのことだよ？」

「え？」

「大丈夫だつた？」

かあと顔が赤くなる。

「う、うん…」

「さつきも？」

「う、うん…ただ話を聞いてただけだから…」

「そう…よかつた」

そう言つてぎゅっと腕に力が加わつてさらに神木君の胸に密着する。

すゞぐドキドキして落ち着かないはずなのにこの温もりに安心してしまう。

ほうと息を吐きながら神木君に体を預けるように抱きしめ返すと

頭皮に激痛が走った。

「いつ痛つ」

「何してるのよ！…瞬ちゃんから離れなさいよ！…」

頭からブチブチと髪の千切れる音が聞こえる。

あまりの痛さに涙が溢れてくる。

「止める万里！…」

いつもの神木君から想像もできないほど怒った声が響いたとたん、髪を引っ張る力が弱まった。

今度は守るように神木君に抱き締められて、混乱した頭で万里さんを見ると顔をくしやりと歪ませて涙を流したまま神木君を見ていた。

「万里…何してるのか分かつてるのか？梁取さんに謝れ」

「な、なんで！…何で万里が悪いの！…その子が私から瞬ちゃんを奪つたんじゃない！」

「万里っ！勘違いしてるみたいだけど俺が梁取さんを好きになつて告白したんだ。梁取さんが悪い事なんて何一つない」

「…何で！…何でその子なの！…別に可愛くもないし、万里の方がずっと前から好きだつたのに！万里の方がずっと瞬ちゃんを好きなのに！…その子が彼女でいい事なんてないじゃない！…」

ズキリと胸が痛い。確かにその通りで、自信を持てるところもない。それなのに私が神木君の彼女で本当にいいのかな…。

知らずうちに体を堅くさせていたらしく、そんな私を安心させるかのように神木君が頭に顔を寄せて髪を撫でてくれた。

「俺には梁取さんはすごく可愛いよ？それに彼女は俺にとつて口アミみたいな存在だから…」

「…ココア？なにそれ？」

納得できないといった顔で万里さんは神木君に訊く。

「梁取さん…覚えてる？」

顔を上げるように神木君の手が頬に添えられ、にっこりと微笑む神木君を見つめ返した。

「『』ア…？」

「そう」

覚えてないよね。と残念そうに呟いたけれど、忘れるはずがない。
だってそれは私が初めて勇気を出して神木君に話しかけた時のこ
とだから。

それは神木君が私の“特別”になつた日から何ヶ月か経つた時だつた。

相変わらずモテモテな彼に、それをガードするように両腕に絡みついている矢吹さん兄妹。そんな状態で彼に話しかけられる人はほとんど居なくて、私は遠くから眺めている田舎だつた。

少し肌寒くなつてきた季節で、温まるために飲み物を買いに行つた帰りの廊下に彼が一人、壁に寄りかかつているのを見つけてた。

いつもの神木君と違つてその表情は疲れているようで、張り詰めている様にも感じた。

このまま通り過ぎてしまおうか。いつものように逃げの思考でいながらも、きつとこんな機会はないと心の何処かで訴えていた。なにより元気がないように見える彼をそのままにして行きくなかった。

前は私が彼に勇気をもらつたのだから今度は私が何かを返したかつたのだ。

自分に出来ることなど何もないのに。

どうしようかと頭を動かすけれど何も思いつかず焦つていると手元にある温かな存在に気がついた。

頑張れ自分っと握り拳を作り、勇氣を出して声をかける。

「か、神木君っ！」

声が震えてしまつた。頭も真っ白で熱が顔に集中するのが分かる。私の呼びかけに気がついた神木君が顔を上げて私を見た。緊張しそぎて私は彼の顔を見る事が出来なくて、少し下を向いて手にある物を差し出す。

「あのつこれココアなんだけど、どうぞ」

「え？」

吃驚しているみたいで受け取つてもらえない。

「 とか普通に考えても訳が分からないに決まっている。突然そんなことを言われて受けとれる人は果たしているのか疑問だ。

「あのつ ハハアって癒し効果があるんだって、それにストレスもいいらしくってねつ。それに今日寒いからこれ飲んだらきっと幸せになれちゃうかもだよ」

緊張のあまり最後は訳の分からないことを言つてしまつた。

それに気づいたのか神木君が吹き出して笑つた。

恥ずかしくて顔が熟れたリンゴのようになつてゐる。

クスクスと笑いながら「ありがとう」と彼は受け取つてくれた。

「 うん。温かくて幸せな気持ちになるね」

何かをかみしめるように言つてほこりんだ顔を見たら無性に泣きたくなつた。

ああ、やっぱり私はこの人が大好きだ。

嬉しくて、つい笑みがこぼれてしまつた。泣くのを堪えた真つ赤な顔は相当不細工だつたに違ひない。

「そ、それじゃあ」

恥ずかしくてこれ以上そこに居られなかつた私は神木君の引き止める声を聞かずにそのまま走り去つた。

その日から少しずつ神木君から話しかけられるようになつたけど（もちろん矢吹さん兄妹が居ない時に。というより居る時は一人が放さないので席に固定される）まさか神木君が覚えていふとは思つていなかつた。

* * *

「覚えてるよ。あの時自分では大丈夫だと思つてたけど、どこかで精神的に不安定だつたんだ。けど梁取さんと話して、すぐ落ち着けた」あの時からずっと気になつてたんだと少し照れたように笑う。

「 つ、そんな事なら万里だつて瞬ちゃんにしてあげるよー? 瞬ちゃんがそんなに「ココアが好きだなんて知らなかつたもん! ! 」ふるふると神木君は頭を振つた。

「違う。別にココアが好きだつたわけじゃない。“あの時”“梁采取さん”がくれたから… 多分万里が“あの時”何かしてくれたとしてもこんなには心は動かされないよ」

決定的な否定に、万里さんは何かを言おうとして躊躇み、ポロポロと涙をこぼした。

その姿はひどく痛ましかつたけれど、私が何かを言つてもかえつて彼女を傷つけるだけだと分かつて、何も出来なかつた。

そんな万里さんのもとに龍太君が近づき、肩に手を置いた。

「万里。とりあえずお前がバカだつたのが悪いんだから謝れ」もちろん俺にも。と、どうやら先ほどのことに相当立腹らしい

龍太君が少し怖い笑顔で万里さんを見る。

その瞬間万里さんの涙が止まつた。

「へへへっ!! 身長も矮小のくせに器まで矮小なわけ!? そんなんだから戦う前に瞬ちゃんに白旗上げんのよ!! ヘタレッ!!」

ふん!! と力を込めて龍太君の足を蹴り、万里さんはすかさず倉庫から飛び出すと走つて逃げた。あっかんべーと舌を出すのを忘れずに。

「あ、んのクソアマアツ!!」と痛みに悶絶していた龍太君は怒りの形相で万里さんの後を追つていった。

しばし呆然としていると神木君がぽつりと言葉をもらす。

「龍太に上手く万里を逃がされた… まだ謝らせてないのに」「え?」

「多分あれ、ワザと怒らせたと思つ」

そうだったんだ… あんなに喧嘩してたけど本当は仲がいいのかな。

万里さんの涙も一瞬で止めちゃつたし。

そんな事を思いながら一人が消えた扉を見ていると少し落ち込んだ神木君の声がした。

「… 梁取さん、俺のこと嫌になつた？」

「えつ？」

「まさか万里がこんな事してるなんて知らなくて… って言い訳だよね…」

苦笑いするように笑つたその顔がすゞく悲しそうで、考える前に言葉が勝手にしてしまつた。

「そつそんなことないよっ！…」

自分でも吃驚するくらい大きな声だったものだから神木君も吃驚している。

それに気がついてまた顔が赤くなる。

「… そんな風になんて思うはずがないよ… だつて神木君は私にとつて“特別”で“絶対”だもん」

恥ずかしくて誤魔化すように笑つてしまつた。

正直吃驚の連続でそんな事を思う暇もなかつた。

だからそんな悲しそうにしないで欲しい。

神木君が私を嫌になることはあつても、私から嫌いになることは無いのだから。

話さなくなつた神木君に不思議に思い仰ぎ見ようとすると、突然神木君に引き寄せられて気がつけば本日一度田の包容をされていた。例の如く心臓はバクバクで、どうしたのかと聞いつにも声が出てくれない。

「梁取さん… ありがと… すゞく嬉しい… 僕にとつても梁取さんは“特別”で“絶対”だよ」

そう言つてさつきよりも強く抱きしめられて、泣きそくながら嬉しくて、おずおずと抱きしめ返した。やつぱりドキドキするのに安心する。

「梁取さん…」

少し赤みがかつた頬をした神木君が、ふわりと笑つた。

その顔が綺麗で、かつこよくて、目が離せず見つめていると、少し顔を傾けた神木君が近づいてきた。

唇に柔らかな感触がして、でもゆっくりとソレは離れて。

それが何なのか分かつたら恥ずかしくて、目を下に向けた。

そうしたら今度は優しく髪を梳きながら頭を支えられて、一度目のキス。

さつきよりも少し長くて、緊張のあまり呼吸を止めていたらしい私は苦しくて神木君にすがりつく。

それに気がついた神木君は顔を離し、さつきより赤くした頬で、私の大好きな笑顔を浮かべてくれた。

「ははは…」「コアの味がする」

言われた意味に気がついて今まで一番顔を赤らめてしまった。

お昼にココア飲んでたもんね。

そう、耳元で囁かれた私は沸騰してしまったのではないかというほど熱くなってしまったのは言つまでもない。

* * *

余談ですが、龍太君が私を好きだという有り得ない噂が流れたのと、神木君が万里さんから「コア攻めに遭つたのはそのすぐ後のこと。

5（後書き）

今まで読んで下さった方ありがとうございました。お気に入り登録も本当にありがとうございました。嬉しく、活力になりました。

拙い文章で申し訳ないです。

面白いって難しい。

日本語って難しい。

文章って難しい。

小説って難しい！！

RにしどきながらRじゃない…R取り下げようかと考えましたが、キスはRなのか？と思いつつ（R・12くらいでしょうか？）そのままに…

続きを読もうか考えましたが（神木君の嫉妬とか）矢吹兄妹があまりにでしゃばり主役一人の陰が薄くなりそうでやめました。（というよりすでに薄くて、主役一人の魅力ってなんぞよ？と本気で謎になつてしましました。）

しかもあまり山もなさそうで面白くないかと…多分オチくらいならあるのかなあ…？

なのでお円様にもなりません。すみません。

とりあえず完結です。

本当にありがとうございました。

灯

ちょっと言いたい事。

万里にココア如きで惚れたと思われた瞬は相当軽く思われてますよね…

万里のセリフのせいであまり締まらないといつ…

活況のつもりなんですかけどね？

それだけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9593x/>

ここあ

2011年11月29日21時47分発行